

第1章 2023年度京都大学構内遺跡調査の概要

千葉 豊 伊藤淳史

1 調査の概要

京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門では、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物新営など掘削をとまなう工事に際し、予定地の埋蔵文化財調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果に照らして、発掘・試掘・立合にわけて実施してきた。2023年度には、以下のように発掘調査1件、試掘調査1件、立合調査1件、資料整理1件をおこなった。また、前年度調査で報告できなかった立合調査3件も合わせて報告する（括弧内は、図版1および表1の地点番号）。

（2022年度）

- 立合調査 医学部構内がん免疫総合研究センター新営外構工事（医学部構内AM19区）
（第1章，図版1-512）
- 吉田南構内基幹・環境整備（電気設備）工事（吉田南構内AN21区）
（第1章，図版1-513）
- 北部構内農学部総合館 Mobil 新設工事（北部構内BC33区） （第1章，図版1-514）

（2023年度）

- 発掘調査 病院構内基幹・環境整備（屋外排水設備）（病院構内AG11区） （第3章，図版1-515）
- 試掘調査 科学研究費補助金による学術調査（北部構内BC28区） （第1章，図版1-516）
- 立合調査 病院構内基幹・環境整備（屋外排水設備）（病院構内AF12区） （第1章，図版1-517）
- 資料整理 医学部構内がん免疫総合研究センター新営（医学部構内AM20区）
（第2章，図版1-505）

2 調査の成果

以上のうち、2023年度に整理を終えたものについて、成果を略述する。なお、病院構内AG11区については第3章で詳述しているので参照されたい。また、第2章の医学部構内AM20区については、昨年度報告できなかった古代以前の遺物について整理した結果を追加報告するものであり、調査の成果については2021・2022年度の年報を参照されたい。

病院構内AG11区の発掘調査 調査地点は、聖護院川原町遺跡に含まれ、西方の鴨川まで150m程度の位置にある。近年、病院西構内でも発掘調査が進み、近世遺跡のひろがり確認されつつあるなかで、今回は最も西寄りの位置を調査したことになり、遺跡の遺

存状況や内容が注目される場所であった。

調査の結果は、近世後半期の遺物包含層2層（黒褐色土および淡褐色土）の厚い堆積が確認されるとともに、基盤の砂礫層上面では、淡褐色土を埋土とする複数の南北溝を検出することができた。調査地東方一帯で実施されてきた既往の調査成果と、ほとんど相違しない状況であり、近世遺跡のひろがりや鴨川にほど近い地点まで良好な状態で及んでいることが確認できたといえる。今後、鴨川沿いの一帯が近世～近代にかけてどのような開発過程を経ていったのか、発掘成果をもとに具体的に復元していく作業が課題となろう。

北部構内B C 28区の試掘調査 日本学術振興会より交付された科学研究費補助金基盤研究(C)22K00985「都市化とは何かー歴史都市京都近郊における長期的検証ー」（代表・伊藤淳史）により、近世末～近代にかけてのキャンパス一帯の都市化の状況を検証する活動の一環として、12月18～20日に試掘調査を実施したものである。具体的には、昨年度2月に天理大学文学部の協力を得て遺跡の探査をおこなった理学部6号館西側の緑地において、探査の反応が得られた位置に2×5mのトレンチを設定し、土佐藩白川邸に関連する遺構の存否確認を主目的に調査した。これらの成果については、2024年度作成予定の研究報告書においてまとめて報告の予定である。

立合調査の成果 北部構内B C 33区については、昨年度に未報告であったものである。平安時代の遺物や堆積層が良好に確認され、次節に詳報している。また本年度末には、病院構内や本部構内で大規模な立合が予定されているが、それらは来年度の年報に報告を繰り越すことになる。

3 北部構内B C 33区の立合調査

位置と環境 調査地点は北部構内の東半、農学部構内入場門を入ってすぐの場所に位置する（図版1-514、図1）。一帯では、これまで大規模な発掘調査は実施されていないものの、道路上を中心に工事ともなう立合調査がたびたび実施されており、縄文時代や古代を中心とする遺構・遺物の確認が報告されてきた。その成果の一端は、今回調査地の西方50mあまりの450地点で実施された2016年度の立合調査による円筒埴輪のまとまった出土報告とあわせて、紹介しているところである〔伊藤・富井2018〕。また、一帯は北白川追分町縄文遺跡として知られる空間であり、調査地東側の理学部植物園内では、縄文後期の甕棺・配石墓群が見つまっている〔中村徹1974b〕。

北部構内B C33区の立合調査

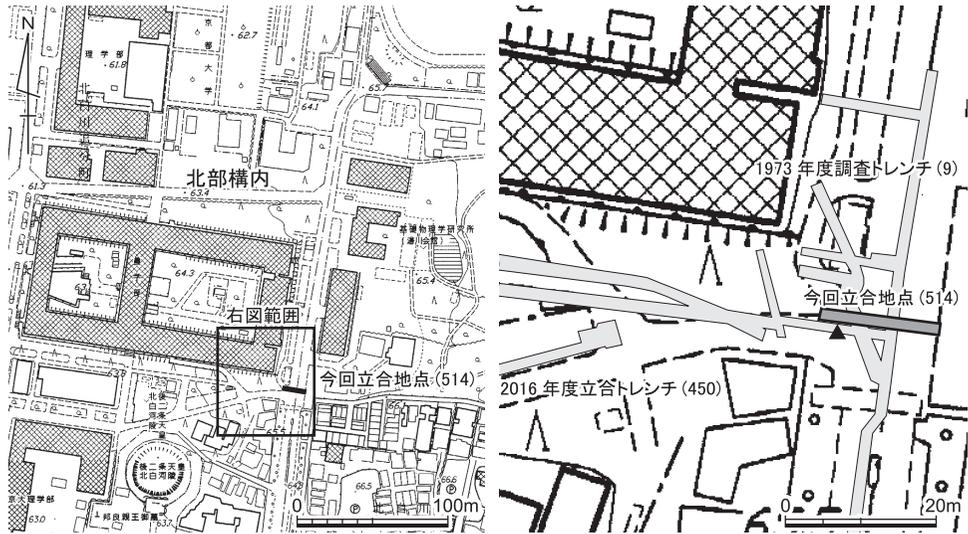


図1 調査地点の位置 (左: 1/5000, 右: 1/1000)

経緯と経過 今回は、この地に光ファイバーケーブル敷設にともなう管路掘削が計画された。東西方向に幅60cmで長さ20m程度、掘削深1mまでという小規模な工事であるが、上記したような既往の成果を考慮し、掘削時に立合いながら遺存状況を確認し、遺構・遺物の発見に備えることとした。調査は2022年11月24日～26日に実施した。

結果、調査地の東半は既存の管路等で攪乱されていたが、西半部分は近世以前の堆積層が良好に遺存していた。このため、掘削後に壁面を精査して層序の良く残る北壁側で記録を作成し、遺物を回収した(図2)。



1. 調査地西半掘削状況 (東南から)

2. 北壁の層序 (→が土器出土箇所)

図2 立合調査の状況

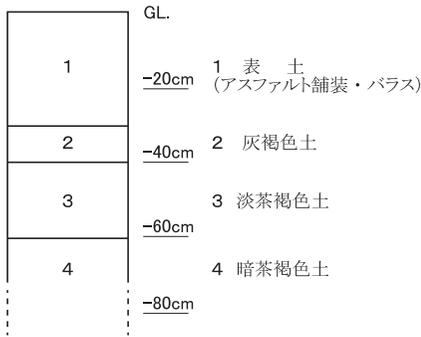


図3 調査地点層序模式図 1/20

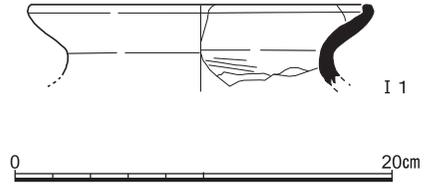


図4 北部構内B C 33区立合調査出土土器

調査の成果 層序を柱状図で示す(図3)。表土下に薄く灰褐色土(第2層)が堆積している。近世～近代の大学設置以前までの耕作土層である。本来はもう少し層厚があったはずだが、削平を被っているとみられる。以下、粗砂質の淡茶褐色土(第3層)、暗茶褐色土(第4層)と堆積している。掘削は現地地表下80cm程度までの暗茶褐色土中で止まったため、これ以下の堆積は不明である。淡茶褐色土中には土師器の微細片が包含され、時期を同定できるものはなかったものの、中世の遺物包含層だろう。暗茶褐色土からは、壁面からおおぶりの土器片が回収できた(図4)。I 1は平安時代中期に比定される甕形土器口縁部片で、口径の1/8程度が残存し、外面は全面煤が付着し黒変している。暗茶褐色土は、その時期を中心とする遺物包含層とみて良かろう。なお、遺構の存在を示すような落ち込みなどの痕跡は、調査範囲の壁面からは把握されなかった。

小 結 今回は範囲が狭小であり、甕形土器片1点のみの回収にとどまったが、1973年度の調査時には、平安時代中～後期の土師器や瓦類が多数出土している〔伊藤・富井2018 pp.50-60〕。こうした周辺での成果も勘案すると、古代の遺跡が良好な状態で一帯にひろがっていることは確実とみられ、今後も慎重な対応と配慮が必要である。